

記録に見る山科の街道と旅

——伏見街道・三条街道（東海道）・毘沙門堂——

細川 涼 一

一 東海道（三条街道）と奈良街道（伏見街道）

——『東海道名所記』に見る

山科（現京都市山科区）は、京都の東の玄関口である。髭茶屋追分（追分髭茶屋町。俗に山科追分とも。現山科区髭茶屋町）滋賀県大津市追分町）から京都三条大橋に向かう東海道（東海道五十三次。髭茶屋追分から三条大橋までは三条街道とも呼ばれた）と、髭茶屋追分から分岐して南に向かう奈良街道（奈良街道はさらに小野（現山科区小野）で、醍醐寺・六地藏・宇治を経て奈良に向かう奈良街道と、勧修寺・大亀谷・深草藤森を経て伏見に向かう伏見街道に分岐する）の二つの大きな街道が山科には通っていた。⁽¹⁾

追分髭茶屋町の東海道と奈良街道（伏見街道）の分岐点（現山科区髭茶屋町）には、右側に「みぎハ京みち」、左側に「ひだりハふしミみち」、さらに別の一面には「柳緑花紅」（柳は緑花は紅。宋の詩人蘇東坡の詩）

と刻まれた、『都名所図会』巻之三にも紹介された道標が立っている（現在現地に立つのは、本物を再現したレプリカであり、江戸時代の本物は琵琶湖文化博物館を経て、安土城考古博物館にある⁽²⁾）。

伏見街道は豊臣秀吉による伏見城築城とともに整備された街道である⁽³⁾。江戸幕府は伏見城を廃城としたが、西国の大名が参勤交代に際して京都の天皇と接触することを禁止し、京都を迂回して伏見を通るようにした。その結果、伏見街道（大坂街道）は髭茶屋追分から、伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の四宿を淀川南岸とともに大坂の京橋・高麗橋まで歩く東海道五十七次ともされたのである。⁽⁴⁾ 浅井了意による近世初期の地誌で仮名草子の『東海道名所記』に、

追分、これより、伏見へわかるゝ也。左の方につきてゆけば、ふしみに出る。楽阿弥申すよう、男殿ハ、大坂衆なれば（『東海道名所記』は楽阿弥と大坂衆の二人の男による道中記の体裁を取っている——引用者）、爰より、醍醐海道、勧修寺越、笠とりを過て（この部分は、

毘沙門堂

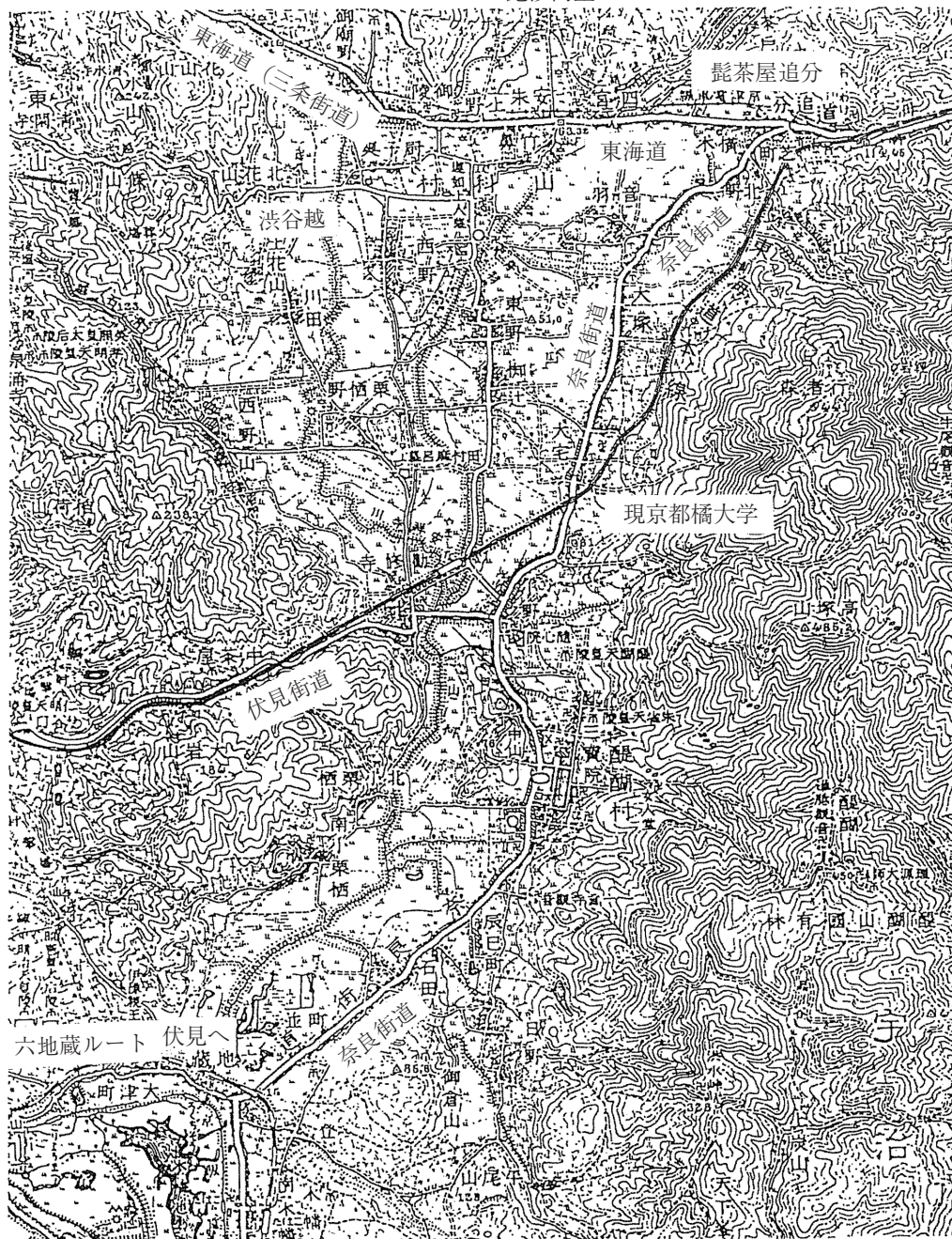


図1 山科の街道(1917年〈大正6〉改版五万分の一地図に加筆)

追分から先に、醍醐海道＝奈良街道と勧修寺越＝伏見街道の二つに分かれる道があるという意味であろう―引用者）、山科を右に見て、狼谷（大亀谷―引用者）より、藤の森を、ふし見の京橋へ出て、舟にのり給ハゞ、明日ハ大坂につきたまはん。去ながら、わかき人天坂衆は「廿四五なる男」とされている―引用者）、只一人、行給ハゞ、日は暮がた也。かの狼谷ハ、山だちおほし。爰を通る人ハ、かへり出がたく、大かた、いにしへハころさりける故に、おほかみ谷とハ名付たりと、聞つたへし。

とあるように、⁽⁵⁾追分髭茶屋町から勧修寺（現山科区勧修寺仁王堂町）を越えて、深草藤森（現伏見区深草藤森）に出る途中、東山山系南端の稲荷山と伏見丘陵北端の大岩山に挟まれた溪谷の大亀谷（狼谷。現伏見区深草大亀谷）は、山立（山賊）も多く出没し、旅人が殺されることも少ない難所とされたのである。⁽⁶⁾

一方、東海道（三条街道）の髭茶屋追分から西については、「かくて、山科につく。爰にも、追分（五条別れ―引用者）あり」として、五条別れから左（南）に分岐して京都五条に向かう渋谷越を紹介するとともに、⁽⁷⁾『東海道名所記』の二人は、十禅寺や四の宮（諸羽神社）の鳥居が右手に見える四宮（現山科区四ノ宮）から日ノ岡峠（現山科区日ノ岡ホッパラ町）下の茶屋に到着し、日ノ岡の礫場（栗田口〔日岡〕）刑場跡。現山科区厨子^{すし}奥花鳥町の飛地。三条街道の現九条山バス停（旧京阪電車京津線九条山駅）の山手）を左の山手に見て、蹴揚^{けあげ}蹴上。現東山区東小物座町。現京都市営地下鉄東西線蹴上駅付近）の水を眺め、さらに栗田口神明宮（現山科区日ノ岡夷谷町の日向神社）を右の山の上に見て、栗田口から京都の三条通に

入っている。

したがって、『東海道名所記』に紹介されたこれらが、江戸時代における山科の三条街道に沿った名所であったといえるであろう。

二 ケンペル『江戸参府旅行日記』に描かれた三条街道

江戸時代初期の山科の街道が描かれた記録としては、元禄四年（一六九二）と翌元禄五年（一六九三）、オランダ商館長に従って長崎から江戸を訪れた、オランダ商館医師ケンペルの『江戸参府旅行日記』がある。ケンペルの『江戸参府旅行日記』に見る三条街道の描写は、『史料京都の歴史11山科区』にも一部が採録され、また、村田路氏による研究もあるが、次にその山科の部分の全文を示そう。ケンペルは元禄四年の第一回、元禄五年の第二回の旅ともに長崎から大坂を経て京都に入り、三条口から東海道を江戸に向かっている。したがって、三条街道の描写は、元禄四年の往路と復路、元禄五年の往路と復路の計四回になる。

○西暦一六九一年（元禄四年）往路（三月二日金曜日）⁽¹¹⁾

長々と続く日岡村を過ぎ、京から一里の奴茶屋^{やつちやや}まで一筋の狭い道を通って行き、そこで茶を飲んで、酒で重くなった頭をいやした。この村はもう一つの藪下村^{やぶのした}（御陵村〔現山科区御陵〕東部の字名―引用者まで続いているが、そこにはたくさん竹がはえているので、そういう名が付いているのである。ここでは非常に良質のたくさ

んのタバコを栽培している。街道から着弾距離の二、三倍の所に、諸羽大明神の社殿がある。街道沿いには立派な鳥居すなわち大きな門が建っていて、その少し先には観音堂（十禪寺―引用者）があり、そのそばの六角形の堂の中には、金ばりの大きな地蔵があつた（四宮地蔵―引用者）。一五分で岩茶屋村に至り（髭茶屋町の誤記であろう―引用者、それから間もなく追分村に着くが、四〇〇戸ばかりの長い町並みをなして、錠前師、工芸品のろくろ師や彫刻師、天秤の分銅を作る職人、針金の製造者などが住んでいる。特に絵師や画商や仏具商などが多い（われわれが駕籠で通り過ぎるまでには、半時間ばかりかかった。右手には雪をかぶつた音羽山が見え、また、ここから伏見に通ずる平らな道（伏見街道―引用者）が分れている。一五分で大津の町に着いた。

元禄四年の往路の旅における、ケンペルの三条街道沿いの山科の記録で注目すべきは、御陵村の字敷ノ下におけるタバコ栽培を記していることである。敷ノ下のタバコについては、『山州名跡志』巻之十四にも、「敷ノ下。地ノ名。鏡山（天智天皇陵―引用者ノ東ニ在リ。此ノ所ノ者多クハ、莨若（タバコヲ刻デ業ト為ス。故ヘ二世ニ敷ノ下ノ刻ミト云フ）とあり、ケンペルの記録が正確であることがうかがえる。

また、奴茶屋（安朱村の三条街道沿い、渋谷越との別れ道北側（現山科区安朱棧敷町）にあり、茶屋として賑わった。近代まで続いたが、山科駅前再開発にともない、一九九四年に建物を取り壊して山科駅前ラクトAのビル内に移り、そこも二〇〇九年一月に閉店した―引用者）は、『拾遺都名所図会』巻之二にも描かれ、茶屋として著名であつたが、ケンペルらオランダ

商館の一行も奴茶屋で休息し、茶を飲んでいる。ケンペルは次に掲げたこの年の江戸からの復路でも、奴茶屋において昼の休憩を取っている。

○西暦一六九一年（元禄四年）復路（四月十六日日曜日）⁽¹⁵⁾

われわれは大谷やそれに続く逢坂の村を、さらに近くの追分の村々を通つて旅を続けた。それから山間にある広大な緑の草原を通り、京都の地域との国境を示す標柱の所に着いた。山下村を通りぬけ、そこから遠くない所にある奴茶屋村（奴茶屋があるのは実際に安朱村―引用者）まで行き、そこで昼の休みをとった。ここから次の山科村（日ノ岡村カ―引用者）までは登り坂で、さらに小さい村を通り過ぎ、山地を越えて蹴上村（蹴上は「村」ではなく、蹴上六軒町・蹴上九体町がある「東海道筋立場」―引用者）に着いた。ここは京の町の始まる所で、それから栗田口という、もう一つの村に着き、さらに幾つかの郊外の町々を通り、三つの川を越えた。そのうち最初の川と次の川との距離は約一五〇〇歩、次の川と最後の川の間は一〇〇歩ほど離れていた。それを渡つて本来の京都の町に入った。

○西暦一六九二年（元禄五年）往路（三月二十日）⁽¹⁶⁾

正午われわれは京都をたち、大きな三条橋を渡つて洛外に向い、そこで別れの杯を交わした。われわれの今日の行程は大津の町まで、通つた村だけを挙げると、

（一）栗田口は、そんなに大きくない村である。ここで六カ月半前に磔にかけられた二人の罪人を見た（栗田口刑場があつたのは、実際

には厨子奥村Ⅱ現山科区厨子奥花鳥町の飛地―引用者。それは近親相姦の罪を犯した男女であつた。

(二)日岡峠は、山の間にあり、大津から二里離れている。

(三)日岡坂。そこでわれわれは山を下りて平野(山科盆地―引用者)に入った。

(四)藪下(御陵村東部の字名―引用者)は、かなり長い村で、ここでは非常に良種のタバコとたくさん竹がとれ、それで住民は大抵裕福な人たちである。

(五)奴茶屋はすぐ前の村に続いている。街道から左手四分の一里の所に諸羽大明神の社殿があり、路傍には立派な鳥居と有名な大きな金張りの地蔵(四宮地蔵―引用者)を六角堂に安置した観音寺(十禅寺―引用者)もあつた。

(六)岩の茶屋(髭茶屋―引用者)

(七)追分ではたくさんさんの仏像を売っていた。すぐ右手には音羽の山という雪をかぶった大きな高い山があつた。傍に伏見に通ずる街道が見えた。路傍にある二、三の村を後にして、われわれは日没一時間ばかり前に大津の町の宿舎に着いた。ほとんど一日中、雨や雪が降り続いていた。

○西暦一六九二年(元禄五年)復路(五月八日)⁽¹⁸⁾

われわれは早朝三時半には大津を後にした。隣合った奴茶屋(安朱村カ―引用者)と藪下(御陵村東部の字名―引用者)の村を通つて、日岡という山の麓にある村に着くと、そこからほど遠からぬ所に南無阿弥陀仏という文字を彫った丈の高い一つの石碑が立ってい

た。その向いに二人の罪人が磔にされていた。その磔の柱のすぐ近くの、しかも石碑も十字架も見えない両側に、粗末な物を敷いて一人ずつ僧侶が坐っていた。そして道に沿って七枚の板がさしてあつた。察するに死んだ者の名がそれぞれ書いてあつたのであろう。また板の一枚一枚には南無阿弥陀仏と書いた旗のようなものが吊してあつた。漆塗りの日笠をかぶった僧は一枚の板の前に置き、その上に金属製の容器を逆さにしたような形の鐘を据え、時々たたいては、なんまんだあを唱えていた。また、そばにもう一つ手桶を置き、それに結びつけた文字の書いてある何枚かの紙片を、手桶にいっぱい入っていた水にちよつとつけた。両側には小さいシキミの束がさしてあり、僧はその一つを小さい棒に結びつけ水をつけて、それで文字の書いてある板切れを絶えず洗ひ浄めた。そしてその都度そこに書いてある死んだ人の戒名を、経文と一緒に唱えていた。前を通り過ぎるすべての日本人は、僧たちに小銭を投げ与えていた。その布施に対して僧たちは、処刑者の霊のために祈願しなければならないのは当然だが、ほかの人(例えば私―訳注)ならば、彼ら僧たちのする賢い顔つきから、彼ら自身の方が、ぜひとも代願が必要だと推論したくなるだろう。ここから、われわれは京の町の入口に達した。

元禄五年の復路では、同年の往路とともに粟田口刑場の情景が描かれ、南無阿弥陀仏と刻まれた六字名号碑のことが見出せる。ケンペルの記録も含めた粟田口刑場の情景と、ケンペルよりは時代が少し下の享保二年(一七一七)に粟田口刑場の南無阿弥陀仏碑を再建し、さらに

享保二十一年（一七三六）から元文三年（一七三八）にかけて日ノ岡峠道を改修した木食養阿（もくじきやうあ）については、村田氏の研究に詳しい（ケンベルが見た南無阿弥陀仏碑は現存しないが、養阿が建立した享保二年のものは現存する）。

三 毘沙門堂と輪王寺宮の江戸上野寛永寺東下の旅

山科も最北端、如意ヶ嶽の麓にある毘沙門堂は、古代に出雲路（現京都市上京区）に創建されたが、江戸時代前期の寛文五年（一六六五）、天海の弟子で江戸上野の東叡山寛永寺に住して天台宗を管領したこともある公海（一六〇七―九五）によって山科安朱・現山科区安朱稲荷山町）の現在地に移築再興された。寛文九年（一六六九）に生まれた後西天皇皇子の公弁法親王が、公海の法嗣として毘沙門堂門跡となり、以来、毘沙門堂は天台宗延暦寺派の門跡寺院（皇室・貴族の子弟が出家して入室する寺院）として隆盛をきわめた。⁽¹⁹⁾

公弁法親王は毘沙門堂門跡ののち、江戸に下向して上野の東叡山寛永寺の貫首となり、輪王寺宮と呼ばれた。⁽²⁰⁾以後、天皇家の親王が出家して江戸に下向し、寛永寺貫首となる慣行が、幕末の最後の輪王寺宮、公現法親王（のちの北白川宮能久親王⁽²¹⁾）まで続いた。毘沙門堂は輪王寺宮が京都から江戸に下向する前に、旅支度を調える寺となったのである。この点をめぐって、J・R・ブラックの『ヤング・ジャパン』⁽²²⁾第十第五章には、次のように記されている。

上野には、（中略）江戸で一番大きくて、裕福な寺として有名な東叡山（寛永寺。山内の開山慈眼堂（天海を祀っている）は寛永寺の伽藍

の一部であるが、輪王寺とも呼ばれた―引用者）があつた。そこが高僧上野宮（輪王寺宮―引用者）の本拠だつた。宮はミカドから、この職に任命され、例外なく、皇族出身だつた。（中略）宮は日光の高僧であり（日光山輪王寺―引用者）、京都の輪王寺の僧でもあつた。そしてこの国で、宮以上に敬われている僧はなかつた。

『ヤング・ジャパン』訳者のねず・まさし氏は「京都の輪王寺」に注をして、「ブラックの誤りか、この寺は上野（寛永寺の開山慈眼堂―引用者）と日光にある」としているが、上野寛永寺・日光輪王寺とともに、ブラックが「輪王寺」と誤記した輪王寺宮が兼職する京都の寺こそが、山科の毘沙門堂（護法山安国院出雲寺）である。

公弁法親王（一六六九―一七一六）は、寛文九年（一六六九）八月二十一日に後西天皇の第六皇子として生まれた。誕生ののち、九月三日には公海の奏請によって毘沙門堂の法嗣となることが決まり、延宝二年（一六七四）五月一日に六歳で山科毘沙門堂に入室した。延宝六年（一六七八）十月十九日に親王宣下、同年十月二十六日に公海を戒師として得度し、天和二年（一六八二）に公海から譲られて毘沙門堂門主となった。元禄三年（一六九〇）三月二十九日、二十二歳で関東に下向して東叡山寛永寺に入り、天台座主・輪王寺宮として天台宗を管領した。以後、短期間上洛はしたが、基本的には上野寛永寺に住した。正徳五年（一七一五）五月、職務を公寛法親王に譲ると本郷蘆葦園の別業に隠居し、享保元年（一七一六）三月二十四日に山科毘沙門堂に戻つた。そして、同年四月十七日に山科毘沙門堂で四十八歳で亡くなると、毘沙門堂の乾（いづ）（西北）隅に葬られたのである（日光山門跡次第⁽²³⁾）。現在も毘沙門



図2 毘沙門堂輪王寺宮墓地(戦前絵葉書「山科毘沙門堂門跡歴代親王御陵」)。手前輪塔が公延法親王、その右卵塔が公遵法親王、奥中央の輪塔が公弁法親王、その右卵塔が公海の墓塔。

堂西北の輪王寺宮墓地に、公弁法親王・公遵法親王・公延法親王・公澄法親王の墓がある。⁽²⁴⁾

上野寛永寺時代の公弁法親王をめぐるのは、いくつかのエピソードが今日に伝えられている。たとえば、寛永寺の麓の所領として根岸の別殿(輪王寺宮の隠居所。御隠殿。現台東区根岸⁽²⁵⁾)があつた鶯谷の「地名の由来は、元禄年間、寛永寺の住職として京都からやってきた皇族の公弁法親王が、江戸の鶯は訛っている、と京都からわざわざ鶯を運ばせてこの土地に鶯を放したこと、鶯の名所となつたとされる」とも

いわれている。⁽²⁶⁾

この点をめぐって、森まゆみ氏は、寛永寺執事・現龍院住職として寛永寺史に詳しい裏井正明氏に取材して、次のような聞き書きを残している。⁽²⁷⁾

森 五代綱吉という人は公弁法親王にずいぶん傾倒していますが、この時の宮様は有名ですね。江戸の鶯の鳴き声が鄙ぶりだ、田舎くさいというので京都からわざわざ取り寄せて放つたとか。それが鶯谷や谷中初音町の名の起りという説もありますが。

裏井 鶯は公寛法親王の時でしょう。公寛法親王が、光琳の弟尾形乾山を呼んで入谷に窯をつくらせたのは事実のようです。公弁法親王は陶芸がお好きで、ご自分で絵も描き、交友も広がった。書を見ても公家風のやさしいものでなく実に雄渾です。綱吉に赤穂浪士の処分について意見を求められ、返事を断つたのも筋が通っている気がします。助けるな、とはいえないだろうし、助けろといえ、主君の仇を討つてなとおめおめ生き延びたと非難が出る。切腹したからこそ今に至るまで赤穂浪士をもてはやすんでしょうからね。

公弁法親王は、江戸に下向して輪王寺宮として寛永寺を管領した二十六年間の前後、元禄三年三月、二十二歳までの青年期と、晩年の享保元年、四十八歳で死去するまでのひと月弱を山科の毘沙門堂で過ごしたのである。ちなみに、大石内蔵助良雄が山科の西野山村に滞在したのは、元禄十五年(一七〇二)十二月十四日に吉良義央邸に討ち入る前年の元禄十四年六月からの一年四カ月ほどであるから、公弁法親王

が山科毘沙門堂に住した時期とは重なっていない。裏井正明氏が述べる二人の接点は、江戸における話である。

山田邦和氏が指摘するように、「毘沙門堂門跡は輪王寺宮が兼ねることが通例だった」のであるが、公弁法親王以後の輪王寺宮歴代で、毘沙門堂に住したことが確実にうかがえる人物を『日光山門跡次第』から拾うなら、次のようになる。

○公遵法親王（二七二―一八八）

公遵法親王は輪王寺宮を二回務めた唯一の人物である。享保七年（二七三）正月三日に中御門天皇の第二皇子として生まれると、同年七月十二日に公寛法親王の奏請によって毘沙門堂の跡を継ぐことになった。享保十五年（二七三〇）十二月二十二日に親王宣下。享保十六年（二七三二）九月十八日、山科毘沙門堂に入室し、即日得度して毘沙門堂門跡と称した。戒師は公寛法親王である。元文元年（一七三六）十一月二十五日、勅会として山科毘沙門堂において灌頂かんぢょうを修行した。元文二年（一七三七）二月一日、山科を輿で出發、十三日に東叡山寛永寺に着いた。翌元文三年（一七三八）三月九日、公寛法親王から職務を継ぎ、天台座主・輪王寺宮として天台宗を管領した。宝暦二年（一七五二）には職務を公啓法親王に譲り、浅草の浅草寺伝法院に隱居、ついで宝暦四年（一七五四）三月十六日からは根岸別殿を隱居所とし、この間宝暦三年（一七五三）二月二十五日から九月二十二日まで、父の中御門天皇国忌の導師を務めるため山科毘沙門堂に滞在した。宝暦十一年（二七六二）、根岸別殿を輿で出發し、十一月四日に山科毘沙門堂に着いた。この毘沙門堂逗留は、一旦は本格的に隱棲して死を迎える準備

をするためであったと思われるが、明和九年（二七七二）七月十六日、法嗣とした公啓法親王が死去したことによって、七月二十五日に山科毘沙門堂を輿で出發し、八月十四日に東叡山寛永寺勸善院に戻った。そして、同年九月二十七日、將軍家の仰せによって輪王寺宮に再職することになったのである。安永九年（一七八〇）三月二十日、職務を公延法親王に譲ると（この間、法嗣とした公顕法親王に先立たれている）、同年七月に浅草寺伝法院に移り、天明二年（二七八二）十月五日には京都の地に戻った。そして、天明八年（一七八八）三月二十五日に山科毘沙門堂で死去し、毘沙門堂の乾の隅の墓地に葬られた。享年六十七歳。輪王寺宮を二回務め、輪王寺宮としては長寿を保った人物である。

○公啓法親王（二七三二―一七二）

閑院宮直仁親王の子。中御門天皇養子。寛保三年（一七四三）十二月二日親王宣下。輪王寺宮となる以前に入室得度した寺院は曼殊院であるが、宝暦元年（一七五一）三月二十八日、勅会として山科毘沙門堂において灌頂を修行している。同年五月十六日、東叡山寛永寺に下り、宝暦二年（一七五二）八月二十一日、職務を公遵法親王から譲られ、天台座主・輪王寺宮として天台宗を管領した。安永元年（一七七二）七月十六日、四十一歳で早世したため、公遵法親王が輪王寺宮に再職したことは前述した。寛永寺慈眼堂境内に墓が営まれた。

○公顕法親王（二七六〇―一七六）

閑院宮典仁親王の子。桃園天皇養子。宝暦十年（一七六〇）二月十四日誕生。安永元年（二七七二）七月二十三日に公啓法親王の法嗣、ついで公啓法親王の死去によって安永二年（一七七三）八月二十六日に公遵

法親王の法嗣となった。安永元年十一月二十七日親王宣下。安永二年（一七七三）十月二十五日に山科毘沙門堂に入寺し、即日得度した。戒師は青蓮院尊真法親王である。これより毘沙門堂宮と称した。安永四年（一七七五）三月晦日、勅会として山科毘沙門堂において灌頂を修行している。同年六月一日に江戸に下り、東叡山寛永寺に入室した。ところが、翌安永五年（一七七六）七月十日、寛永寺の入室から一年余り、わずかに十七歳で死去した。寛永寺慈眼堂の境内に葬られた。

○公延法親王（一七六二—一八〇三）

閑院宮典仁親王の子。桃園天皇養子。宝暦十二年（一七六二）十月二十九日誕生。安永六年（一七七七）二月八日、公遵法親王の奏請によって法嗣となり、八月二日に親王宣下、十月十三日に江戸に下向して東叡山寛永寺に入室し、翌安永七年（一七七八）三月十八日、公遵を戒師として得度した。これまでの輪王寺宮は京都で出家得度してから寛永寺に下っているが、兄の公顕の早世という事態もあってか、寛永寺で急遽出家得度したはじめての事例である。したがって、輪王寺宮となる以前に山科毘沙門堂に住したことはなかったが、寛政五年（一七九三）七月三日に職務を公澄法親王に譲ると同年七月二十五日に根岸の別殿に隠居し、寛政九年（一七九七）十月五日には生まれた京都に戻って山科毘沙門堂に住し、享和三年（一八〇三）五月二十七日に山科毘沙門堂で死去した。享年四十二歳。毘沙門堂の乾隅に葬られた。

以上の公遵・公啓・公顕の事例から、山科毘沙門堂における灌頂修行は、輪王寺宮が上野寛永寺に下向する準備として行ったものであることがうかがえる。先に毘沙門堂を輪王寺宮が寛永寺に下向するため

の旅支度を調える寺と述べたのは、如上の理由による。そして、輪王寺宮は次の輪王寺宮に寛永寺貫首の職を譲って隠居すると、しばらく根岸別殿や本郷蘆葭園（公弁の事例）・浅草寺伝法院（公遵の事例）などの江戸郊外の別業で過ごしたのち、死を迎える準備をするため、最後は山科毘沙門堂に帰って来たのである。毘沙門堂は輪王寺宮が江戸に下る旅をする前に一人前の僧侶となるための修行をし、そして、寛永寺で職務を果たして隠居したのち、晩年に帰ってきて死を迎える準備をする寺であった。³⁰⁾

四 アーネスト・サトウの幕末の山科通過の旅

江戸時代前期のケンペルの山科通過の旅は『史料京都の歴史11山科区』にも一部が抄録されるなどしてよく知られているのに対し、幕末にイギリス人の外交官、アーネスト・サトウが大坂から伏見を経て東海道を江戸に戻る途中、山科を通ったことはあまり注目されていない。アーネスト・サトウは、慶応三年（一八六七）三月二十八日、将軍徳川慶喜が大坂で英仏蘭の公使と会見し、兵庫の開港を確約した際、イギリス公使ハリー・パークスの日本語書記官として大坂に随行した。そして、大坂からの復路は、パークスとは別れ、画家のワグマンとともに伏見から陸路の東海道を通って、江戸に戻ったのである。

そこで次に、サトウの『外交官の見た明治維新』の「第一八章 陸路、大坂から江戸へ」から、伏見から山科を通過して髭茶屋追分・大津までの旅の記述を示そう。³¹⁾

朝食をすませてから、われわれは駕籠にのって（伏見から―引用者）陸路の旅をはじめた（大坂から伏見までは淀川を船で上った―引用者）。町役人（伏見町奉行所―引用者）の一階級ともいべき町方の一群が、一張羅を着こんで、私たちを町はずれまで警護してくれた。宇治川の岸と、優雅な竹の藪でおおわれた低い樅（訳注 松あるいは杉か）山との間の道が、一マイルもつづいていた。それから、右手に宇治の茶畠を見ながら、小山の間を曲がりくねっている道を通って追分に達し、ここで東海道へ出たのである。京都から、次の休息所である大津までは、沿道にずっと石を置んだ、一種の軌道になっていた（車石。サトウは奈良街道から追分髭茶屋町で東海道の出、逢坂関を越えて大津に着いたのであるから、実際に東海道の車石を見たのは追分以東の部分である。追分から京都三条に入る東海道の三条街道部分はサトウは歩いていない―引用者。（中略）追分は、煙管、計算盤（算盤）、鳥羽絵という一種の漫画（大津絵―引用者）など有名で、山城の国と美しい琵琶湖との境界をなす一連の小山（逢坂山山系。最高峰は音羽山―引用者）のふもとにある町だ。道路のかたわらには、当時の製造業によく見られた規模のきわめて小さい、いくつかの茶焙じ場があった。まず茶の嫩葉（わかば）を湿し、漆喰（しっくい）の炉の火室に薪をくべ、下から加熱される平盤の上にその葉を広げて、一々手で燃（ひ）るのである。こうして作った新茶は、それよりも一段と良質な茶の場合と同様に日本流のやりかたで微温湯をそそぐと、うまくて、爽快な飲料となる。これらの作業場では、いずれも一個所に二人以上の人間は働いていなかった。一時に大津に着いた。

前述したように、伏見街道は（伏見から東に向かってスタートすると）伏見から深草藤森を経て大亀谷を越え、山科の勸修寺・小野に至る勸修寺ルートが「東海道分間延絵図」にも幕府管轄の東海道（五十七次）とされ、一般的であったが、宇治川から山科川（現京都市伏見区桃山町伊賀の京都橘高等学校の辺りで宇治川に合流する）沿岸をさかのぼって、六地藏（現伏見区桃山町―宇治市六地藏）で奈良街道に合流し、醍醐寺を経てさらに小野で勸修寺ルート伏見街道と合流する六地藏ルート（奈良街道六地藏經由ルート）も主要ルートとして使われた。⁽³⁴⁾

サトウは、「宇治川の岸と、優雅な竹の藪でおおわれた低い樅（訳注 松あるいは杉か）山との間の道が、一マイルもつづいていた。それから右手に宇治の茶畠を見ながら」と記しているから、恐らくは伏見から六地藏ルートで追分髭茶屋町に出たのであろう。サトウの奈良街道の描写は簡略であるが、「小山の間を曲がりくねっている道を通して追分に達し」という部分が、奈良街道の現伏見区醍醐から現山科区小野・大宅・大塚・小山辺りのことを示す部分であろう。ことに、「小山の間を曲がりくねっている道」という描写に注意するなら、それと合致するのは、醍醐醍醐寺門前から小野（隋心院門前）に向かう府道大津宇治線の伏見区醍醐新町裏町から醍醐上ノ山町の辺り（弘法大師独鈷水の辺り）と、山科区音羽珍事町・小山鎮守町（その境界を奈良街道が通る）から京都東インターチェンジの高架をくぐって、四ノ宮芝畑町・小山神無森町（同じくその境界を奈良街道が通る）を追分髭茶屋町に至る上り坂の辺り（音羽病院前から京都東インターチェンジの高架をくぐっての上り坂）のいずれかである。

奈良街道の描写が簡略であるのに対し、髭茶屋追分(追分髭茶屋町)をめぐるサトウの記述は、車石や、大津絵・茶焙じ場の物産のことも記して精緻である。明治十四年(一八八二)の『京都府地誌』宇治郡村誌の髭茶屋町の記述では、髭茶屋町の物産は製茶・算盤・針・紡小車とされ、「京都及び各国へ輸出ス」とされているから、製茶・算盤に關してはサトウの觀察と一致する。

山科は京都の東の玄関であり、京都はもとより、伏見・大坂や奈良に向かう街道の追分にも当たる交通の要衝でありながら、洛中に比して記録に登場する頻度は少ない。右に記したのはその山科の街道をめぐる記録の一端である。⁽³⁶⁾

注

- (1) 風人社編『ホントに歩く東海道第15集 南草津・三条大橋・伏見』風人社、二〇一六年。東海道の北側が近江国の現大津市追分町、南側が山城国の現山科区髭茶屋町・八軒屋敷町であり、街道を挟んだ両側で所属する国が異なっていた。図1は、京都橋女子大学・山科民俗調査会「山科の地域景観と民俗の変容」(山科本願寺・寺内町研究会編『掘る・読む・歩く 本願寺と山科二千年』法蔵館、二〇〇三年。原図は、古地図研究会編『明治大正日本の五万分の一地図集成Ⅲ』学生社、一九八三年。所収)掲載の大正六年(一九一七年)改版五万分の一地図に加筆。

- (2) 竹村俊則校注『都名所図会』上巻、角川文庫、一九六八年、三〇〇頁。「追分は京師・伏見・大津の駅路なり。道分の石に柳は緑、花は紅の文字を刻む」とある。今井金吾『江戸の旅 東海道五十三次物語』河出文庫、一九八八年、二三二頁。臼井喜之介『風物詩 京都文学散歩 続篇』展望社、一九七七年改裝版、五一九頁。

- (3) 山本眞嗣『京・伏見歴史の旅』山川出版社、一九九一年。横田冬彦

「豊臣政權と首都」(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』文理閣、二〇〇一年)。

- (4) 風人社編『ホントに歩く東海道第16集 京街道(追分・樟葉・伏見)』風人社、二〇一七年。同編『ホントに歩く東海道第17集 京街道(樟葉・高麗橋)』風人社、二〇一七年。伊東宗裕「江戸時代の伏見」(日本史研究會編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』前掲)。

- (5) 浅井了意、朝倉治彦校注『東海道名所記』2、平凡社東洋文庫、一九七九年、一三六―一三八頁。

- (6) 『都名所図会』卷之五は、「大亀谷は藤の森より勸修寺を経て山科・追分に出づる街道なり。いにしへこの所に茶店ありて、容顏艶はしき女あり。名をお亀と称す。自然と所の名に呼んで大亀谷といひしなり」として、お亀という茶屋の女がいたことから大亀谷と呼ばれたとする異説を述べる(竹村俊則校注『都名所図会』下巻、角川文庫、一九六八年、七〇頁)。

- (7) 渋谷越は古く苦集滅道とも呼ばれた。元弘三年(一一三三)五月、六波羅探題北方北条仲時らが六波羅を落ち、近江番場蓮華寺で自殺するに際して通ったのもこの道である。『太平記』卷第九「主上上皇御沈落事」に、「苦集滅道の辺に野伏充滿て、十方より射ける矢に、左近将監時益は、頭の骨を被射て、馬より倒に落ちぬ」とあるように、六波羅探題南方北条時益は、東山から五月闇の中を渋谷越で山科に抜ける途中、待ち伏せていた野伏の射た矢で頭の骨を射られて落馬し死亡した。また、「四宮河原を過させ給処に、(中略)何くより射る共知らぬ流矢、主上(光厳天皇)引用者の左の御脇に立にけり」とあるように、六波羅探題に同行していた持明院統の光厳天皇は、渋谷越が東海道に合流する山科の四宮河原で流れ矢が脇に当って負傷した(岡見正雄校注『太平記』二、角川文庫、一九八二年、九〇―九二頁)。

- (8) 蹴上水(今はない)は、『都名所図会』卷之三に、「蹴上水は、むかし源牛若丸、金売吉次に具せられ、陸奥へ赴き給ひし時、平家の侍関原与市といふ者、牛若の美少年に戯むれ、この水を蹴上げしかば、牛若丸太刀を抜いて与市をはじめ郎等どもを多く伐捨て通り給ひしより、名づけ初

めしなり」として、源義経伝説による地名の由来を伝える(竹村俊則校注『都名所図会』上巻、前掲、二九六頁)。蹴上付近の義経伝説とかかわる「史跡」(義経地蔵二体・義経大日如来。義経が斬り殺した関原与市らの菩提を弔うため、九体の地蔵を祀ったうちの現存するものという)の現状は、川口正貴『源義経と源平の京都』ユニプラン、二〇〇四年、三〇―三三頁、山科区御陵血洗町(京都薬科大学グラウンド内)の「義経の腰掛石」「牛若丸血洗池」(与市らを斬り殺した刀を洗ったという)の現状は、京都新聞出版センター編『義経ハンドブック』京都新聞出版センター、二〇〇五年、一八―一九頁、参照。前者について、『雍州府志』巻第九の「九体町」の項には、「同処(蹴上水、六軒茶屋の辺り―引用者)ニ在リ。相伝フ、与市ガ徒九人斯ノ処ニ於テ斬ラル。土人之ヲ憐ミスノ処ニ九体ノ石阿弥陀仏ヲ造リ之ヲ薦トフ。今其ノ像纔ニ残レリ」とその由来を伝え、後者については、同じく「血洗池」の項に、「義経、与市ガ徒ヲ斬テ、而シテ後、刀ヲ洗フ処也」とその由来を伝える(『新修京都叢書』第十巻 雍州府志、臨川書店、一九六八年、六九六―六九七頁)。

(9) 京都市編『史料京都の歴史11山科区』平凡社、一九八八年、二六九頁、など。

(10) 村田路人「近世の山科」(後藤靖・田端泰子編『洛東探訪 山科の歴史と文化』淡交社、一九九二年)。同「近世の山科」(京都橘大学・山科区役所協力『山科の歴史と現代』山科経済同友会、二〇二〇年)。

(11) ケンペル、斎藤信訳『江戸参府旅行日記』平凡社東洋文庫、一九七七年、一三一頁。

(12) 『新修京都叢書』第十六巻 山州名跡志坤、臨川書店、一九六九年、三二頁。京都市編『史料京都の歴史11山科区』(前掲)、二六九頁にも所載。以下、記録・地誌のうち『史料京都の歴史11山科区』に掲載(抄録)されているものについては、適宜引用を略す。

(13) タイムスベース『京都』昭文社Uガイド、一九九三年十二版、四〇四頁。四半世紀前のガイドブックである同書掲載の山科・醍醐の料理屋・旅館・ホテルなどのうち、奴茶屋はもとより、山科区安馬場町(毘沙

門堂参道)のひのき、安兵衛、上花山花ノ岡町(渋谷越。五条バイパス)の京都東急イン、六地藏駅前の京都醍醐プラザホテル、ふれあいスポーツDAIGOなど、紹介されている施設のはとんどが一九九〇年代から二〇〇〇年代に廃業して今はない。往時の奴茶屋について、臼井喜之介氏は「山科あたりでとれた新鮮な野菜を上手に煮つけて食べさすので有名だ」と述べていた(臼井喜之介『風物詩 京都文学散歩 続篇』前掲、五一―九頁)。

(14) 『京都叢書』都名所図会・拾遺都名所図会、京都叢書刊行会、一九一六年、一六二―一六三頁(奴茶屋の図絵あり)、一六六頁。片岡丑兵衛という弓箭の達人が旅人を悩ます盗人を討伐し、人家もないこの場所に茶屋を建てて旅人を送り迎えたことにはじまるという。奴茶屋は和宮や明治天皇をはじめ、多くの人が京都から江戸に下向する途次に休息したことでは知られるが、幕末に新選組の武田観柳斎(新人物往来社編『新選組大事典』新人物往来社、一九九四年、一五五頁「武田観柳斎」の項)活躍の舞台ともなった。慶応元年(一八六五)八月八日、薩摩藩の橋口四郎・隈本壮助が「洛東蹴上村」の奴茶屋に押し入り、金策の強談をした。亭主は困って新選組の屯所に訴え、新選組は武田観柳斎の指揮で、六、七名が奴茶屋に出張した。二人は新選組と見るや、一言もなく、抜刀して掛かったが、橋口は即死し、隈本は深手を負って生け捕られ、一応の尋問のち、二本松の薩摩藩邸に身柄を送られた。激しい戦闘で武田観柳斎は刀を折られた、というのである(西村兼文『新撰組始末記』(一名壬生浪士始末記)。新人物往来社編『新選組史料集』新人物往来社、一九九三年、二九頁)。西村兼文(新選組の屯所とされた西本願寺の侍臣)は、奴茶屋の場所を「洛東蹴上村奴茶屋」と記しているが、三条口(粟田口)から三条街道を下り、蹴上から日ノ岡を詰めると安朱村の奴茶屋があり、洛中から見て感覚的に同一方向であることからの混同であると考えてよいであろう。前述した義経による関原与一の斬殺伝説でも、伝説にもとづく「遺跡」の場所は洛中から見て感覚的に同一方向の蹴上から御陵の血洗町まで広がっている。このように記すのは、西村兼文による「洛東蹴上村奴茶屋」の記述を重視したためであろう、「龍馬・新選

- 組が駆けた幕末京都めぐり地図」ユニプラン、二〇〇九年、は、「山科奴茶屋明治天皇御幸処」とは別に、わざわざ蹴上に「奴茶屋跡(武田観柳斎・薩摩藩士捕殺の地)」を記しているが、多少穿^かちすぎた見解と考えるからである(新人物往来社編『新選組史跡事典(西日本編)』新人物往来社、二〇〇二年、一六六頁、も同様に多少穿った考察をしている)。江戸時代に行行政区分としての「蹴上村」という村はない。蹴上は蹴上六軒町・蹴上九体町がある(「東海道筋立場」(追分髭茶屋町とともに京都三条と天津宿の間の休憩所であった中山清『近世の山科』山科の近世 京都近郊天皇領の記録 文理閣、二〇一七年、九四―九六頁)。このような「中心」から見た「周縁」の混同の著名な事例としては、江戸の南郊外、大井村の一本松にあった一本松獄門場が、隣村不入斗^{ふりう}村入新井の鈴の森と混同して、江戸の方から見ての鈴ヶ森刑場の総称が定着してしまった事例がある(現品川区南大井二丁目。日蓮宗大経寺がある。品川区文化財研究会『品川区の歴史』名著出版、一九七九年、二〇七頁。平野栄次『品川区史跡散歩』学生社、一九七九年、一七二―一七四頁)。
- (15) ケンペル、斎藤信記『江戸参府旅行日記』(前掲)、二二三頁。
- (16) 同二七〇―二七一頁。
- (17) 林美一氏は、「奴茶屋の立場を過ぎて日の岡・蹴上となるが、東下りの旅人たちは、この辺の茶店に休んで留別の酒宴に別れを惜しんだものであった。逆に上りの旅人を出迎える者たちも、このあたりで落ち合った」と述べている(林美一『艶本紀行 東海道五十三次』河出文庫、一九八六年、三四三頁)。
- (18) ケンペル、斎藤信記『江戸参府旅行日記』(前掲)、三〇〇―三〇一頁。
- (19) 『社寺の建造物と障壁画 第一集 臨川寺・曇華院・毘沙門堂』京都市文化観光局文化財保護課、一九七八年(川上貢・武田恒夫執筆)。『週刊古社名利巡拝の旅39山科・醍醐 京都 醍醐寺・毘沙門堂』集英社、二〇一〇年(左方郁子執筆)。
- (20) 寛永寺と輪王寺の関係については、松本和也氏は、「当時の輪王寺と寛永寺の関係は、寛永寺の住職というべきものが輪王寺の宮であり、東叡山御門主ともよばれた」と述べている(松本和也『台東区史跡散歩』

- 学生社、一九七七年、一八一―一九頁)。輪王寺宮について、三田村鳶魚は、「將軍も十五代であったが、公卿からは輪王寺宮(これは朝廷からの呼称)と申し、幕府からは日光御門主、略しては日門様と申し上げた、その御門主も公遵法親王が御再職なされたが、最後の鎮護王院公現法親王(後の北白川能久親王)まで、十五代であった」と指摘している(三田村鳶魚『寛永寺の上野』『芝・上野と銀座』中公文庫、一九九九年、一三二―一三三頁)。なお、産経新聞社会部編『東京風土図』Ⅱ、社会思想研究会出版部現代教養文庫、一九六一年、六一頁、徳永隆平『東京の寺』保育社カラーブックス、一九七三年、六頁、も参照。
- (21) 森嶋外『能久親王事蹟』(『鷗外歴史文学集』第一巻、岩波書店、二〇〇一年)。山崎有信『彰義隊戦史』マツノ書店、二〇〇八年復刻(一九一〇年元版)。
- (22) J・R・ブラック、ねず・まさし 小池晴子訳『ヤング・ジャパン 横浜と江戸』1、平凡社東洋文庫、一九七〇年、一五一―一五二頁。
- (23) 『続群書類従』第四輯下補任部、続群書類従完成会、一九七八年訂正三版五刷、所収。なお、公弁法親王に先立って、毘沙門堂を山科に移築再建した公海も元禄八年(一六九五)十月十六日、八十九歳で山科毘沙門堂で死去すると、毘沙門堂(西北隅の墓地に葬られた(日光山門跡次第)。公海は天皇家の出自ではないが(公家の花山院忠長の子)、毘沙門堂の輪王寺宮墓地に葬られた最初の人となったのである)。
- (24) 戦前給葉書『後西院天皇皇子公弁親王・中御門院天皇皇子公遵親王・輪王寺宮御墓(山科安朱)』。同「山科毘沙門堂門跡歴代親王御陵」。竹村俊則『昭和京都名所図会6洛南』駸々堂、一九八六年、二九九頁。
- (25) 上野の山の北裏、現台東区谷中七丁目、谷中墓地の間から上根岸(現根岸二丁目)へ下る御隠殿坂があったが、東北本線の敷設によって削り取られてしまった(石川悌二『東京・山の手の坂下町の橋』池田書店、一九七六年、二〇四頁。小森隆吉『台東区の歴史』名著出版、一九七八年、一八七頁。横関英一『江戸の坂 東京の坂』中公文庫、一九八一年、二二四頁。林家こぶ平『お江戸週末散歩』角川書店、二〇〇三年、一五頁)。これが寛永寺から根岸別殿(御隠殿)に下る坂であった。

(26) 本橋信宏『東京最後の異界 鷺谷』宝島社、二〇一三年、三頁。なお、矢田挿雲『江戸から東京へ』第一巻、中公文庫、一九七五年、「下谷区(台東区)」の「鷺と狸の根岸」の項も参照。台東区根岸の現況については、泉麻人『大東京23区散歩』講談社、二〇一四年、八六頁も参照。

(27) 森まゆみ『彰義隊遺聞』新潮文庫、二〇〇八年、一〇七頁。森氏は地域雑誌『谷中根津千駄木』の編集者として、内田康夫『上野谷中殺人事件』角川文庫、一九九一年、の登場人物のモデルとなった。なお、三田村鳶魚『寛永寺の上野』(芝・上野と銀座)前掲、加藤藤・坂口よし朗『都電荒川線各駅停車』保育社カラーブックス、一九八三年、「孤高に生きた尾形乾山」の項も参照。

(28) 山田邦和『京都 知られざる歴史探検 上 上京洛北洛東・山科』新泉社、二〇一七年、「徳川家光廟から来た灯籠―毘沙門堂」。

(29) 御隠殿について、松本和也氏は、「公遵親王が浅草伝法院に隠居された後、根岸へ本格的に隠居所を造り、宝暦四年(一七五四)には、根岸を御隠殿と呼ぶようになったが、上野戦争で焼失し、明治以後は鉄道敷地に取上げられた。現在近くの根岸薬師堂(根岸2-19-10)に、御隠殿跡の碑がある」と述べている(松本和也『台東区史跡散歩』前掲、九八頁)。公遵をめぐる氏の典拠史料も、『日光山門跡次第』であろう。

(30) なお、親王で関東に下向し、京都に戻って山科に葬られた人物の先蹤として、鎌倉幕府の皇族(親王)将軍として鎌倉に下向した宗尊親王(後嵯峨天皇皇子。一二四二―七四)の事例がある。『勤仲記』文永十一年(一二七四)八月一日条に、「今夕中書王宗尊親王引用者御葬礼、奉渡山科、被用御車、如平生御行云々」とあって(史料纂集(高橋秀樹・櫻井彦・中込律子校訂)『勤仲記』第一、八木書店、二〇〇八年、五七頁)、宗尊親王の墓所が山科に営まれたことは確実である。

(31) アーネスト・サトウ、坂田精一訳『外交官の見た明治維新』上、岩波文庫、一九六〇年、二六六―二六七頁。

(32) 風人社編『ホントに歩く東海道第16集 京街道(追分・樟葉・伏見)』(前掲)、『MAP No.61 髭茶屋追分・墨染』『MAP No.62 墨染・淀』。

(33) 六地藏(京阪電車宇治線六地藏駅)の現況については、リーフレット

「京阪電車×響け！ユーフォニアム2019 舞台めぐりMAP」京阪電車お客さまセンター、二〇一九年、参照。六地藏の地名は、当地の大善寺(現伏見区桃山町西町)が京都から地方に至る街道に沿った六地藏廻り(廻地藏)の一番奈良街道とされたことにもとづく(本稿で言及した東海道の四宮地藏もその一つ)、廻地藏(六地藏)の名は確実な史料に早く、関白鷹司兼平が宇治平等院に御出した際、供奉した勘解由小路兼仲の馬が中途で病気になる、「廻地藏以南」において馳せ参ったという『勤仲記』弘安元年(一二七八)十月二十日の記事に見出すことができる(史料纂集『勤仲記』第二、八木書店、二〇一〇年、一八頁)。

(34) 風人社編『ホントに歩く東海道第16集 京街道(追分・樟葉・伏見)』(前掲)、『MAP No.64 奈良街道經由伏見』。

(35) 京都市編『史料京都の歴史11山科区』(前掲)、三八九頁。

(36) なお、近代文学に山科が描かれた事例としては、「山科川の小さい流れについて来ると、月が高く、寒い風が刈田を渡って吹いた」ではじまる志賀直哉の「山科の記憶」(一九二五年発表。「山科川」は正確には山科川に注ぐ支流の四ノ宮川)がよく知られているが(志賀直哉『城の崎にて』角川文庫、一九七三年改版十三版、所収)、戦後では和久峻三の推理小説がある。和久の推理小説は、多作も相俟って傑作とはいえないものもあるが、京都府警の警部補音川音次郎を主人公とする「京都殺人案内シリーズ」第一作の長編『死体の指にダイヤ』では、「洋子は山科の南大塚でバスを降り、家路へ向かった」とあるように、音川音次郎が娘の洋子と二人暮らしをする家が、山科の大塚(奈良街道に沿った京阪バス南大塚バス停を降り、東にある妙見寺参道へ入った辺り)に所在する設定になっている(和久峻三『死体の指にダイヤ』京都連続殺人事件『角川文庫、一九七七年、四三一頁』)。この設定は、第二作以降でも一応踏襲されているが(シリーズ第九作の中編『夕顔の女』には「音川たちは、山科の音川の引用者家の前でタクシーを降った」とある(和久峻三『復讐の時間割』角川文庫、一九八七年、二九四頁。『復讐の時間割』は「京都殺人案内シリーズ」第五冊目)。また、シリーズ第十作の長編(第六冊目)の『明智光秀の謎殺人事件』にも、「音川音次郎が、

山科の自宅へ帰ると、一人娘の洋子が、いそいそと出迎えてくれた」とある（同『明智光秀の謎殺人事件 妖星のいけにえ』光文社文庫、一九九六年、五四頁）。シリーズ第四冊目収録の表題作「血の償い」（シリーズ第七作の中編）では、登場人物の女性が山科のレンタルハウスに軟禁される設定になっている。軟禁場所から女性が大学のコンクリートの塀に沿って走って逃げ、飛び込んだタバコ屋は、「旧三条通りと呼ばれている古い家並の並ぶ一画にあった。かつては、大津から山科、京都へ通じる東海道が通っていたのだ。彼女が、大学のコンクリート塀と言ったのは、京都薬科大学のことだった」とされている（和久峻三『血の償い 京都殺人案内』角川文庫、一九八五年、二六七―二六九頁）。「京都殺人案内」は藤田まことによる音川音次郎役主演でテレビドラマ化されたが、藤田まことの好演に、クロード・チャリの印象深いエンディング「夜霧のシルエット」〈CD『SENTIMENTAL CLAUDE CHARI』ソニー・ミュージックハウス、二〇〇三年、収録〉が相俟って、ドラマの方が原作よりも味わい深い作品に仕上がっている。ただし、ドラマでは音川音次郎の家が山科大塚にある原作の設定は受け継がれていない）。山科区には、京都薬科大学と京都橘大学の二つの大学がある。文学者の文に表れた京都橘大学としては、大宅寺を訪れた尾崎秀樹の一九七四年の紀行文に、「（大宅寺を―引用者）ぜひ拝観したいと思い、大宅氏の祖神を祀った岩屋神社のあたりを、二度も三度も廻ってみたが、新築の家屋が多く、大宅寺の所在を知る人はなかなかいなかった。やむなく名神高速道路の下までもどり、大宅のバス停から橘女子大学（当時―引用者）の方へ向ってあらためてたどり直し、やっと探しあてることができた。小さな竹藪の下にかくれた、一般の家屋と変らない建物で、本堂と庫裡をかねた一棟がそれだった」と見出せる（尾崎秀樹・駒敏郎『京都散策 伏見宇治』保育社カラーブックス、一九七四年、九九頁）。